
悲痛なテレパシー

安堂仔一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲痛なテレパシー

【Nコード】

N4502X

【作者名】

安堂仔一

【あらすじ】

ある日、主人公「僕」の元に謎の来客「タキシード男」が現れる。彼は「僕」を誘拐すると、そのまま異国のある屋敷に連れ出した。その屋敷内で「僕」が見たものは、人工的装置によって生かされた植物状態の「お嬢様」の姿だった。彼女は「僕」に以前テレパシーで助けを求めており、彼も彼女を助けようと試行錯誤を繰り返す…。摩訶不思議恋愛空想劇。作者煩惱につき、更新は遅いですが、長い目で見守ってやってください。

心の奥から声が聞こえる。

「助けて・・・」

女の子の声だ。

「誰？」

その声に僕は答える。

けれども、返事はない。

テレパシー？そんなものあるのだろうか。けれども、その声は確かに聞こえる。

「助けて・・・」と。

いったい誰が、なぜ僕に助けを求めているのか。そうして、それがなぜ僕の心の中に届けられたのか。

・・・わからないよ。君のことが。

明くる日の朝、僕は学校へと向かった。なんてことはない。僕はただの田舎の中学生だ。毎朝起き、学校に行く。家から学校までは歩いて30分ほど。少し遠いのがネックだ。それでもって、学校の規則が厳しくて、自転車通学などは許されていない。なんとも理不尽なものだな、と毎朝通学しながら思うのだった。

教室に入り、何気なく友人たちと話したりする。そんでもって授業が始まり、それをまじめに受ける。代わり映えのしない日常。それこそが、僕の中学生生活のタイトルともいえそうだった。

友達が少ないわけでも、いじめられているわけでもない。けれども友人たちとはあまり深入りしないようにしていた。部活動に入っ

いない僕は、放課後になれば、そそくさと家に帰る男だ。もうずつと、そうした生活を送っている。

家に帰っても誰も待っているわけでもない。うちは両親が共働きだから、平日でも夕方まで家にいないことが多い。姉弟として、大学生の姉がいるけれど、何となくいつも忙しそうにしており、やはり家にはいないことの方が多かった。

そんなこんなで、学校が終われば、僕はひとりぼっちなのであった。これを僕は、「自由タイム」と呼んでいる。

さて、今日はどうしようか。昨日読んでいた本の続きでも読むか・・。

そうしてリビングでしばらく本を読んでいると、来客がきたことを知らせる鐘が鳴った。誰だろう。僕は玄関へと向かう。

玄関を開けると、そこには黒いタキシードを着た男性が一人で立っていた。

「ど、どちら様でしょうか」

「・・・来ればわかります」

そういつて、男は家の前に止めてある黒塗りの車を指さした。

「・・・な、なにを言ってるんですか」

「・・・車に乗れ、と言ってるんですよ。わかりませんか？」

そう言つて、男は僕にピストルを向けた。さもなくば、殺すぞ、という眼差しで。

気がつけば、僕は男の車に乗り、どこか遠くへと連れられているのだった。手には、手錠をかけられている。

「いったい、どこへ連れていくつもりなんだ！」と僕が問いかけても、

「・・・着けばわかるでしょう」としか男は答えない。

かろうじてわかることは、この車が高速道路をひた走っていることと、僕がこの男に誘拐されてしまったということだった。

「着きましたよ」

車が止まったのは、それからかなりの時間が経ってからだった。

「じ、ここは・・・？」

「・・・わかりませんか。日本海ですよ。」

に、日本海・・・あれに見えるは、日本海だというのは。もう夜遅いので、暗くてよく見えないが、どうやら港かなにかに着いたようだ・・・。

「あなたには、これから船に乗ってもらいます。そうして、ある人のもとへと向かうのです。これは命令です。」

そういつて今度は男は近くにある船を指さした。銃口を僕に向けな

がら。

「・・・くっ」

そうして、僕はそんなに大きくはない船に乘せられ、大海原へと旅立つのだった。

翌朝、目が覚めると、僕は船の上だった。

「こ、ここは・・・？」

どうやら、どこかの島か何かに着いたらしい。船はすでに停泊していた。

「おや、起きましたか。」

僕を誘拐した男が現れた。

「こ、ここはどこだ？」

「ふふ・・・。少なくともあなたの国ではありませんよ。」

「な！」

「これからあなたはこの国でくらしてもらいます。これは命令です。」

あいかわらず、銃が僕に向けられている。

「・・・日本に返してくれ」

「だめです。あなたを必要としている人がいるので。」

「な、なぜ僕なんだ！そいつのために僕を誘拐したってのか！」

「ええ、そうです。」

「くっ……。に、日本に返せよ。今すぐに！」

「……。死体になって、帰りますか？」

そう言つて、男は銃口を僕の額に当てた。

「……。勘弁してください」

「ふふ、いい子です」

それから、僕は船から降ろされ、男の後をついていった。しばらく歩いた後、目の前には豪邸といえる建物が。

「着きましたよ」

「えっ」

「あなたには、これからこちらで暮らしてもらいます」

そうして僕は……。その豪邸の中へと誘われた。そこに入る前に、男に「逃げ道を覚えられては困りますので」という理由から、目隠しをされた。

男に引つ張られるようにして、建物の中を移動する。

いくつか部屋や階段を経たのち、男が「ここです」と言い、扉を開けた。そうして、その中で、目隠しと手錠を外された。

そこで僕が見たものは・・

人工呼吸器やら何やらをつけベッドに寝かされた女の子の姿だった。

「な、こ、これは」

「・・・植物状態となった、女の子、いえ、お嬢様です。」

聞けば、この女の子は事故で脳に障害が残り、植物状態になっているという。

「その子と、僕の誘拐とで何の関係があるっていうんだ!」

「ありますとも。気づきませんか?」

「な、なにを言って・・・」

「（助けて）」

えっ・・・

今、また心のなかで声が・・・

「（助けて）」

ふと、女の子を見た。も、もしかして。

「おわかりになりましたか。そのお嬢様があなたにテレパシーで助けを求めているのです。特別な装置によって、私はそれを突きとめた。そして、あなたをここに連れてきた、というわけです。」

「な、なんだって・・・」

「なぜお嬢様があなたに助けを求めているのか、それは私にもわかりません。ですが、お嬢様があなたに助けを求めているというのは、事実なのです。だから、あなたにはここに居てもらいます。そうして、お嬢様をどうか、お助けください・・・」

男はそう言つと、僕に頭を下げた。

「・・・わかった。けれど、条件がある。彼女が助かったら、僕を日本に返してくれ。」

「・・・そうですねえ。検討します」

そんなこんなで、僕は違う国のどこかの屋敷に連れ去られ、僕に助

けを求めている植物状態の女の子と一緒に暮らすことになったのだ。

見慣れぬ屋敷。目の前には、人工的な装置によって生かされている少女。

「助けて・・・か」

彼女はなぜ、僕を選び、そして、僕にテレパシーで助けを求めてくるのだろう。それを聞いてみたい・・・が・・・どうすればいいのやら・・・。

「ぐぎゅるるる」

・・・腹減った。考えてみれば、昨日の昼からなにも食べていない。タキシード野郎は僕にここに居ろというが、僕の食事とか面倒を見してくれるのだろうか・・・。とりあえず、この部屋の外に出て聞いてみるか・・・。

だがしかし、扉を開けて外に出ようとするも、外から鍵がかかっており、こちらからは開けられそうになかった。

「こりゃあ、だめだな」

おとなしく、外から人が来るのを待つしかないのか・・・。

しばらくして、扉をノックする音があった。扉が開いて、メイド？が食事を運んできた。

「さすがに死なれると困りますので・・・」と言って、部屋の小さなテーブルの上に食事を置いてくれた。

「彼女の分の食事は？」

「ああ、お嬢様でしたら、お構いなく」

何でも、食事でも食べられない体であるらしい。考えてみれば、それはそうか・・・。

食事を終え、メイド（どうやら本当にメイドらしい）がそれを片づけると、また扉は閉められた。食事の時に逃げるというのも・・・できないはないのか・・・？

いや、だがあのタキシード男のことだ、きっと外で銃を握りしめて僕を待ち伏せしていることだろう・・・。部活動もろくにやっていなかった僕にとって、体を張った仕事というのは、どうにも手に着かないのは明らかだ・・・。逃亡はあきらめよう。

そこからは、僕と少女、ふたりきりの時間が続いた。だが、あれからというものの少女からのテレパシーはなく、沈黙が続いている。

「せめて、僕にもテレパシーが使えればなあ」

「お困りですか？」

「わっ！び、びっくりした・・・」

タキシード男め、いつの間に僕の背後に・・・。やはりこいつは出来

る男のようだ・・・悪い意味で。

「ふふふ。お困りかと思つて、こんなものを用意しました」

と言つて、僕に何かを渡す。

「テレパシー養成キット・・・」

「はい、左様で。お嬢様と交信したければ、それを使つて見てください」

「ちよつと、待て。なんで僕にやらせるんだ！ほかにテレパシー出来る奴とかいないのか？そいつを介してもらえば、楽じゃないか」

「くくく・・・、お嬢様があなたに助けを求めているのを、忘れたのですか。あなたが交信して助けなければ、意味がないでしょう。お嬢様がそれを求める以上、私どもには、たとえテレパシーが使えたとしても、あなたをお助けすることはできませんよ」

「ぐぬぬ・・・。そうか。なら仕方ない。これ、ありがとう」

「いえいえ、せいぜいご精進ください」

男はまた扉の向こうへと消えていった。

残された僕は、もう一人残された少女のために、テレパシーを覚えようと頑張るのだった。

それからというものの、僕の格闘は続いた。「養成キット」に付属の本と、装置（頭に乗せて使うもので、精密な機械のよう。だが案外軽くできている）を使いつつ、テレパシーしようと悪戦苦闘していた。だが、マニュアルどうり試してみるものの、一向にできやしない。

「せめて中学校でそういう授業があったらなあ・・・なんてな・・・」。

今日のところはあきらめるかなあ・・・。はあ・・・。僕自身が電腦化された人間だったら出来るかもしれないのになあ・・・。ってアニメの観すぎか。

仕方なく、途方に暮れてる僕。

ふと、少女をまじまじと見てみる。装置に触れないように、その頬に触れてみた。その肌は白く、冷たい。何ともいたたまれない気持ちになった。

それからまた食事が来て、僕だけがそれを食べた。その後、執事？に連れられ、入浴を許された（着替えまで用意してもらった）。その間、少女をかかりつけの医者とか、看護師とか、メイドとかが検査とかいろいろしていたようだ。

それらが済むと、また部屋に戻った。窓の外はすっかり夜になっている（ちなみに昼間窓の外を見ると、庭園が広がっている）。僕は、何となくなぜか部屋にあるピアノの前に腰を下ろした。

「鍵もかかってないし、ちょっと弾いてみてもいいよな・・・。」

蓋を開けて、軽く弾いてみた。調律もちゃんとされているようだ。

「では、1曲・・・」

薄明かりの部屋で、僕はピアノを奏でる。曲は、ラヴェルの「亡き王女のためのパヴァーヌ」だ・・・何とも切ない旋律が、静かな部屋の中に満ちていく。

そうして曲を弾き終わった。

「次は亡き王女のためのセプットでも弾くかあ？ここ屋敷だしな」と、冗談まじりに何となく、少女の方を見る。

少女は泣いていた。

「なっ」

僕の弾いたピアノに反応したというのか・・・？

僕はピアノの椅子から立ち、少女の頬を伝う涙を拭った。

「（助けて・・・）」

彼女の声がまた聞こえた気がした。

この世界に私はいない。

だから、世界がどうなるうとも、私には関係ない。

世界に見捨てられた私。

どうして？

どうして世界は私を見捨てたの？

わからない。

悲しい。とっても。

こんな私を救ってよ。誰か。お願い。

・
・
・

・
・
・

・
・

目覚めると、僕はまだ屋敷だった。目の前で少女がベッドに横たわ

っている。昨日はあの後、気がついたら壁にもたれていて、そのまま眠ってしまったらしい。僕は立ち上がると、大きく体を伸ばした。そして少女に向けてこう言った。

「おはよう」

彼女は相変わらず、大人しく眠ったままで、返事はなかったけれど。

「おはようございます」

「!?!」

少女の寝顔をのぞき込んでみると、いきなりタキシード男がやって来た。

「おや、何かお嬢様の顔に付いてましたか？」

「・・・いや、そんなことはないぞ」

「ふむ。わかっていると思いますが、お嬢様にいかがわしいことをした場合・・・この私、ただじゃあおきませんよ？」

うつ・・・こいつ目が真剣だ。

「ああ・・・そんなこと、わかってるさ！俺も一応、紳士だからな」

「ふむ。まあ、ご注意くださいね。ところで、どうです？習得されましたか、例のものは？」

たぶん、テレパシーのことだろう。

「・・・そ、それは・・・」

「ふう・・・まあ、そんなに急かすつもりもありませんが、あなたの面倒を見るのも、タダではございませんので、できれば、お早めにお願ひしますね」

「ああ・・・そうだよな。わ、わかった」

「それに」

男は“お嬢様”をチラと見る。

「こちらとしては、一刻も早くお嬢様を「助けて」もらいたいので」

そう話す男の目は、どこか哀しみに満ちた色をしていた。

「ああ・・・。こちらでも早く国に帰りたいからな。努力はするよ。」

そういうと男はにつこりと笑った（不気味だ・・・）。

「ところで、ずっと気になっていたが、あんたはあの少女の何なんだ？」

「ふふ・・・それは、そのうちわかりますよ」

ぐぬぬ・・・。ったく、こいつは本当に、こっちの質問に答ええないやつだ。

「・・・そうか。まあ、いいけどさ」

「ふふ。では、頑張ってください」

そう言い残し、男はまた扉の向こうへと去っていった。

ふう、いなくなったか。どうも、あの男は苦手なんだよな……。こっちの質問には答えなくせに、齒に衣着せぬやつ……。正体も謎だし、とことんわからないやつだ……。

まあ、やつのはどうでもいい。とにかく僕はテレパシーを覚えて、目の前の少女を救い、さっさと日本に帰るのだ！

なにはともあれ、まずはきちんと「養成キット」の使い方を覚えな
いと、話は始まらない。僕は真剣に付属のガイドブックを読み込む。

（にしても、このガイド……翻訳版だからか、すごく読みづらいぞ。。）

・
・
・

・
・

それから、何時間たっただろうか。ようやく、僕は「養成キット」

の使い方を理解した（気がする）。

要するにあれだ。装置の電源が入っていないまま、習得しようと必死になっていたわけだ……。ハッハッハ。

「……早く気づけよ、僕。」

そして、僕は装置の電源を入れ、マニュアル通りにやってみる。

「スイッチオン！！！」

その瞬間！

「ビビビビビビビ！！！！！！！！！！」

「ぐああああああああああ！！！！qあwせdrftgyふじこip・@…」

あ、頭にとりつけた装置から……。二、高圧電流がつ……。

「う、うああああああああ！！！！」

で、電源を……。OFFに……。し、しないと……

「びびびびびびびびび！！！！！！！！！！」

「……し、死ぬうつつつつ！！！！orz」

だが、無情にも電源を切ることが出来ず、装置から流れてくる高圧電流のおかげで、僕は意識を失うことになった。

ビビー・ビビビビビビ・・・びびびびびび

（その後も電流は流れ続けた・・・のだろう）

・・・ここは、どこだろう。海の中？

いや、でもちゃんと息が出来る。でも、確かに水の中にいるような・・・。

あれ、僕はいったいどうしたんだっけ。

・・・そうだ、あの「養成キット」の装置で感電して・・・。

ああ・・・。

こうしている間にも、僕は水ではない透明な水のようなものの中へと、落ちていく。

僕は、死んだのだろうか？

日本にいる家族は、今頃、僕のことを心配しているだろうな。

母さん、父さん、そして姉さん。僕はもう駄目かもしれません。先に逝くことを、どうか、お許しください・・・。

僕は目をつぶった。ああ、このまま深い水（たぶん水）の奥深くへと落ちて死ぬんだろう。

・・・

・

だが、どんなに深く落ちようとも、呼吸が出来るため、僕が死ぬことは無かった。っていうか、ここは天国か何かで、もう僕は死んだ後だったりして……。ははは……。

気が付くと、水でない何かの底へと僕はたどり着いたようだ。これ以上、もう落ちることはない（と思う）。

それにしても、驚くほど静かだ。そして生き物や水草なども見あたらない。あるのは水、岩、そして僕だけだ……。

……と思つて周囲を見渡してみたら、少し遠くの方に人影？を見た。僕は思いついて、その方へと泳いでいく。

（誰か居るのか？……）

僕はその人影の近くまでたどり着くと同時に、言葉を失った。

それは、あの屋敷に住む、僕が助けるべき少女そのものだったからだ。

いや、本人かどうかはわからない。だけど、膝を抱くようにして座っているその少女は、僕が目にしていたあの少女とそっくりなのだ。服装や髪型、体格など、うり二つである。

（おーい）

僕は彼女に声をかけようとした。しかし、（たぶん）水中なので、声が届かない。

しかたなく、彼女の肩に触れようとした。

（！？）

その時、僕は気が付いてしまった。少女の四肢が鎖で岩に繋がれていることに。おそらく、彼女はこの場所から、動くことができないでいる。

そこで僕の気配に気が付いたのか、彼女は顔を上げ、こちらを向いた。目を見開いた彼女の素顔を、僕は初めて見た。

（な・・・に・・・？）

唇の動きから、彼女がそう言ったのがわかった。

僕は言った。

（君を助けに来た）

（本・・・当・・・に？）

半信半疑な少女の表情。

（うん、本当に）

僕がそう返すと、彼女はにっこり笑った。それが本当のまぶしくて・・・まるで・・・彼女から光が放たれたように光輝いて見えた。

そのまま光が一面に広がって行って・・・

・・・

・・・

「はっ
」

「・・・目を覚ましましたか」

タキシード男・・・それにメイドさんも・・・あれ、さつきまで僕は、「彼女」と会っていた・・・のに・・・。

「びつくりしましたよ！お食事をお持ちしたら、倒れていらしたから・・・」

メイドが本当に驚きを隠せないように言う。

「大丈夫ですか。しばらく気絶していたようですが」

「・・・ああ、たぶん」

体が動くか試してみるが、何ともないようだ。

「こちらの家政婦に呼ばれて、来てみたら、あなたが「テレパシー養成キット」の装置をつけたまま倒れていました。どうやら、感電のようでしたね。高圧電流が装置から流れていました。当時の状況を覚えていますか？」

そう言えば、そうだった。

「・・・、どうやら装置の使い方を間違えたようですね。きちんと説明書きを読んで使ってくれないと、困りますよ」

「ああ、済まない。迷惑をかけた」

「まあ、何はともあれ、あなたもお嬢様もご無事でー安心です」

「ああ・・・」

そうだ、そう言えば少女はどうなったのだろう。僕はチラっと彼女

の方を見してみる。

少女はそれまでと同じように、人工装置に包まれながら、ベッドに寝ていた。

その後、少女の掛かり付けの医者に僕も見てもらったが、やはり何ともなかったらしい（よかった・・・）。

食事などを済ませたら、夜になっていた。

ふと先の出来事を思い返してみる。

僕が見た、あの光景はなんだったのだろう。

水中のような世界に存在していた彼女。

見た限り、今ここで植物状態となり眠っている少女とそっくりだった。というか、同一人物だろう。

僕はその彼女に約束をしてしまった。君を助ける、と。

「君を助ける」

今度は眠っている彼女に向けて、僕はつぶやいた。

なんとしても助けたい。さっき君が見せたあの笑顔に、僕は恋をし

てしまったのだから。

私はここにいない。

ここにいるのは、私でない抜け殻。

私が見る景色。

それは、荒れ果てた海の底。

一面に広がる無。

私の四肢は鎖で繋がれ、動けない。

神様がいるのだとしたら、

どうして私にこんな絶望を味わわせるのだろう。

孤独、きっとそれが私の人生のテーマだ。

でも・・・

さっき来た彼はいつたい誰なのだろう。

彼は私を助けるって言うてくれた・・・。

「助けて・・・お願い」

そして、私はまた膝を抱えて、ただ時が過ぎるのを待つ。

彼が来ることを祈りながら・・・。

・
・
・

・
・
・

・
・

翌日。養成キットによる、「臨死体験」を経験した僕の元に、来客が訪れた。

「改めましてこんにちは。私、この屋敷の執事、でございます。何度かお目にかかったかと思いますが、この度、あなた様の教育係に任命されました。これからどうぞ、よろしく願います」

「は、はあ。ど、どうも」

ぽかーんとする僕。

「坊や一人では「テレパシー」を習得するのが、難しいのではないかと私ども一同、非常に危惧しております」

「は、はあ・・・」

ぼ、坊やって僕のことだよな？

「そこで私が、キットの使い方などを逐一教えます。ええ、安心してください。一緒に、楽しく、テレパシーをマスターしましょうねえ」

そういうと執事は一步踏み寄り、思い切り僕の手を握ってきた。

「え、ええ・・・よろしく」

おいおい、この執事こんなキャラだったか？そして、なんか妙に嬉しそうなのは、気のせいだろうか・・・。

「（小声で）・・・ああ・・・いいわあ・・・坊やに教育指導とか・・・夢のようだわあ・・・」

「え、何か言いました？」

「・・・うんうん、な、なんでもございませんよ。はは、ははは・・・」

思いつ切り怪しい顔をされてますよね。。

・・・こうして、僕と執事のワンツーマンレッスンが始まった。

執事が言うには、いきなり装置をつけてない人間（つまり少女）と

の交信は、素人には難しいとのことだ。

「なので、まずは練習がてら私とテレパシーし合いましょう 私も坊やと同じ装置を使いますので、これなら結構簡単に交信し合うことができると思いますよ」

と言つて、執事は頭に僕が使っているのと同じ装置を着けた（ちなみに細かい設定などは全部彼任せである）。

「いいですか、坊や。テレパシーを相手にうまく伝えるにはとにかく「愛」が大切なんです。相手を思いやる気持ち、それでもつて伝えたい言葉を包み込む。そうして相手のことを思い浮かべ、それを念じることが必要なんです」

「は、はひ・・・」

愛だなんだとよく力説できるなあ、この人……。聞いているこっちが照れてしまう。

「（小声で）ああ・・・愛だなんだと聞いたとたんに、ちょっと照れてるわぁ・・・うつわ、マジ萌え！萌え！萌え！」

「え、何か言いました？」

「・・・いいえ、な、なんでもございませんよ。はは、ははは・・・」

それから、お互いの装置を起動させた。精神を統一し、相手に伝えたい言葉を頭の中で念じる。

「・・・」

「・・・」

だが、執事が思いやりだの愛だの言うせいで伝えたいと思う言葉が
思い浮かばない。

「・・・」

チラっ。

・・・目を瞑って集中していた執事が今、こちらをちらっを見た。う
ぐ・・・。よ、余計気が散るってばよ。

にやにや。

・・・なんかあいつこっちを見たままにやにやしてるんですけど。
するとそのとき、

「（ああ～いいわあ。。坊や最高！！萌え！萌え！キュン！！）」
執事のからのテレパシー

「ぶっっ！！」

「もう、真面目にやらないと何にも伝えられませんよ！」

「いや・・・今アンタの気色悪い声が交信された気がしたんだが・・・」

「え、え、え！あっはは！聞こえちゃいましたか。はっはっは」

「はっはっは、じゃねえよ、もう！何考えてんだよ！！」

「（ああ・・・怒る顔も、すごくキュートだわあ・・・）」 テレパシー

「うっ！また来た！」

このときから僕は、執事がこの手の性癖の持ち主であると認識し、彼と居るときは常に身の危険を感じる羽目になった。

・・・

・・・

その後も、執事からの交信内容に戸惑いながらも、練習を重ねた。その結果、装置を着けた者とであれば、僕も多少はテレパシーを送ることができるようになっていった。

そして夕飯の時間。

いつものようにメイドが親切に食事を運んでくれた。

だが、いつもと違うことがひとつ・・・。

「なんで、執事あんたも一緒なんだよ！」

「ええ、いいじゃありませんか。一人で食べる食事っておいしくないでしょう？」

「そりやそうかもしれないけど、なんでよりによってシヨタコンあんた野郎と一緒に食わなきゃいかんのだ。」

「・・・まあ、いいよ。でも、今日だけだぞ。」

「いや、ありがとうございます」

結局、執事と僕とで夕食を食べた。

「つかぬことを聞いてもいいですか、坊や」

「うっ、急に改まってなんだよ。気持ち悪い」

「ふふふ。坊やって聞くと、中学生だそうじゃあないですかあ」

「そ、そうだけど、それがどうしたってんだよ？」

「中学生つてえ、思春期まったただ中じゃあないですかあ。ってことは、やっぱり、好きな子とか、いるんですかねえ？え？どうなの、そこんとこ」

執事は意地悪に、そして鼻息を荒くして問いつめた！

「そ、それはだな・・・、えっと、うん、まああれだ。そ、そんなことどうでもいいじゃないか。ああ、今日のご飯はうまいな。」

練習の後食う飯は格別だあゝ」

「ええゝ、どうなんですか？ぜひ、教えてくださいよ。い、い、ないなら私・・・が？・・・な、なんて？」

「いや、それだけは遠慮願いたい」

「ひゝん、ひどいつ！！坊やのいけずうゝ！！」

僕があの少女を好きなことも、このときチヲと彼女を見たことも、執事こいつには内緒こいつなのだった。

その日はたぶん水曜日だったかと思う。大学の講義を聞き終わり、友人たちと大学内のカフェでダラダラと話し込んだ後、私は電車に飛び乗った。何を隠そう、その日は平日にも関わらず、Ｊリーグの試合があつたのだ。私は、私の敬愛するチームを応援するために、スタジアム行きの電車に乗った。右手には、サッカー雑誌。鞆の中には、大学のテキスト・ノートなどと一緒に、観戦用グッズが入っている。

「やはり、サッカーはスタジアム観戦が一番よねえ・・・」

私はしみじみと思う。

「いい女には、煙草とスタジアムと、そしてレプリカユニフォームだわね・・・」

まあ、今はまだ着替えてないから、ヒラヒラした私服なんだけど。

そうして、電車を降り、喫煙所に行くと、私は煙草に火を付けた。

「喫煙所がビルの屋上にあるって、どうなのよ・・・」

その後、しばらく煙草を堪能した。それにしても喫煙所なのに、私しかないいわね・・・。屋上なんて来るの、私くらいだからか？

「おっと、いけない。もうこんな時間だ」

ふと時計を見ると、もうすぐ試合が始まる頃だった。私はトイレで

ユニフォームに着替えた後、スタジアムへと向かった。

・
・
・

・
・

「さすがに平日は人が少ないわねえ」

スタジアムを眺めると、普段より観戦者が少なかった。まあ、このクラブが最近落ち目だったのも原因かもしれない。去年のJ2降格劇（劇っていうより悲劇）なんて・・・もはや思い出したくもないわ・・・。

おっと、アンセムが始まったわ。周りの人たちと私も立ち上がり、それを歌う。しっかりとゴール裏を盛り上げてなくっちゃ。

「ちなみに、「えっお姉さん、一人でサッカー観戦かおwww」ってツツコミはなしの方向でお願いね」

って誰に言ってるんだろう。

試合が開始して、しばらくたった頃だろうか。不意に私の携帯が鳴った。

「もう、誰?!人がせつかくスタジアム観戦してるっていう時に・・」

相手は母だった。人が多くて動けそうもないので、私はその場で電話に出る。

「あつ、もしもs」

母が話題を切り出す前に、私は断りを入れる。

「もしもし、お母さん?ごめん、私今、観戦に必死なの。とりあえず、試合終わったらかけ直すね!ごめん!!」ガチャッ。

この時私は、弟があんなことになるうとは、まったく思わなかった。

その後、試合は終わった。

「5-0の大勝よ!おっほっほ!見たか、これが我が軍の実力よ!」
はよ、J1上がってくれ・・。

勝利の余韻に浸りつつも、満員でギュウギュウな電車で飛び乗って、家路についた。

・
・
・

・
・
・

・
・

「えっ、あの子がいない？」

家に帰った私を待っていたものは、父と母のうなだれる姿だった。

「そうなのよ、いつものように私が仕事から帰ってきたら、あの子がいなくて……。それで今まで待ってたんだけど、普段なら帰ってくるのに、今日は帰ってこないの」

「どこかで遊んでるんじゃないの？」

「うーん、どうかしら。あの子、携帯持っていないし、確認できないから……」

「あいつがこんな時間まで遊んでるなんて、俺は思えないなあ。あ

いつも真面目で、学校が終われば、いつも家にいるような奴じゃないか」

母に代わって、父が自分の意見を言う。

「うーん、まあ確かにね。あ、そうだ。ところで、置き手紙とかメモか何か残ってないの？」「どこかへ行ってきます」みたいな、さ」

「それが、残ってないのよ・・・」

母は相当落胆しているようだ。無理もない。

「代わりに残っていたものは、リビングに置かれたこの本くらいさ・・・」

父が「これだ」と弟の本を差し出す。

「こっ、これは・・・!!」

「「モテ学」めざせ、リア充マスター」・・・って何この本ww
w」

思わず苦笑。

「ああ、ちょっと読ませてもらったが、あいつもこんな事に興味を持つようになったか、と内心感動したよ・・・。我が子よ、成長したのだな、と」

父はしみじみとしていた。その様子に母も「そうねえ」と同調し、軽く微笑んだ。

本の内容は弟の名誉のためにも、ここでは割愛するとして、問題は彼がどこにいるか、ということだ。

すると私はあることに気が付いた。

「もしかして、この本が弟のメッセージそのものなのかもよ!？」

「な、なんですって!」「なんだとう!！」

いや、そこまで驚かんでも。

「弟はリビングにこれを置いていった。なぜか。それはこの本のタイトルとか中身そのものが、彼からのメッセージに当たるからよ! 彼はこの本を置いておくことで、彼の居場所とか行き先を私たちに暗示しようとしたんだわ!」

どう、この名推理。

「そ、そうか・・・そういうことか」

両親は妙に納得してくれている。

「と、言うことは、それを読み説けば、あいつの居場所がわかるかもしれない、ということだな?」

父が少し興奮して聞いてくる。

「ええ、そうよ!そうに違いないわ!」

いや、本当はそんなに自信を持って言えることじゃないんだけどさ。

「「モテ学」めざせ、リア充マスター」か・・・、そういえば、このくだり・・・どこかで見たような・・・」

「はっ！！！」

一同、気づいてしまった。それがポケ　ンの主題歌のタイトルと酷似していることに。そうか、そのパロディなのか、この題は。

「と、なると・・・、奴は「リア充」を目指して、旅に出たということか・・・？」

父が真剣な眼差しで推理する。

「そうよ、きっとそうだわ！」

今度は父が見せた名推理に、私と母は思わず感嘆した。

「そうか・・・あいつも相当「リアルの充実」を欲していたのだな・・・。少年よ、大志を抱け、とは言うが、ここはあいつの意志を尊重して、しばらく放っておいてやろうか・・・」

しみじみとした様子で我が子の気持ちを汲んだ父は、私たちにそう問いかけた。

「ええ、そうしましょう」「そうだね」

特に反論もなかったので、私たちはそれに賛同した。

「頑張るのだぞ、息子よ！」「頑張つて！」

胸が熱くなってしまったのか、両親は泣いていた。どこか遠くにい

った弟の「活躍」を祈りながら。

「あつはは・・・これで、良かったのかしら」

その日から今日で何日たっただろうか。一向に弟の消息はつかめない。やっぱり警察に搜索願いを出した方がいいのではないか。

なんだか、ますます弟のことが心配になってきた（いろんな意味で）。

「・・・まつ、いつか。あーあ、早く次の試合の日にならないかなあ。次は因縁の対決よ！ここで勝たずして、いつ勝つというの？！行くわよ！！！！」

そうして、私はベランダで煙草をふかす。

いい女には、煙草とスタジアムと、そしてレプリカユニフォーム・・・だわね。

「頑張るのだぞ、弟よ！」

そして私は大学へと向かった。

「熱い、熱いよお・・・うわーん。うちが燃えてるよお・・・。パパ、ママあ・・・」

燃えさかる炎。それに包まれる私の家。その光景が怖くて、幼い私はその場に立ち尽くし、泣きわめいた。

だが、いくら泣きわめいても、誰も来てくれない。パパもママも。

その間にも、火の手はどんどん私の周りに迫ってくる。幼心に「もう駄目か」という感情が宿る。

すると、その時だった。

「誰がいるかあー！！！！いるなら、返事をしろお！！！！」

近所の住人か何かが、勇敢にも火の手のあがる我が家に入り、助けに来てくれた。

「うわーん！うわーん！」

「そっちか！待ってろ、今助けてやるからな！」

そうして、私は見知らぬ命の恩人につかまれ・・・

抱きかかえられながら、火の粉の中を・・・進んで・・・

外へと・・・

・
・

・

「はっ
」

目が覚めると、そこはいつもの屋敷。

「夢か・・・」

幼い頃の私、そして家族を襲った火事の夢。忌まわしい記憶・・・。
忘れたいのに、忘れられないうえ、今でもこうして時々夢にみる。

「・・・パパ・・・、ママ・・・」

もう、戻らない人々。どうして私だけが・・・。

私は記憶に蓋を閉じるかのように、洗面台で顔を洗い、気持ちを切り替える。暗い過去のこととは、もう忘れたつもりだ。

「・・・もう何があっても、私は挫けない・・・」

・
・
・

・
・

あれから毎日、執事との「ワンツーマンレッスン」は続いている。

部屋にはホワイトボードや机が導入されるまでに至った。この前のような実践練習も行われるが、今ではこうして執事による「テレパシー養成講座」が講義形式で実施されている（もちろん、聞くのは僕だ）。

何でもこの執事は、学生時代は教員志望だったらしく、教員免許状まで持っているらしい。意外にも高学歴であり、教育に対して情熱的なのだった。

「僕は単なる変態執事だと思ってたんだけどな・・・」

「坊や、何か言いましたか？」

「いや、何にも。はは」

「そうですか。では、授業に集中してくださいね」

そうして変態執事は、教鞭をふるうのだった。その姿は結構、様になっている。

「ではそろそろ休憩しましょうか」

「ああ・・・」

ふう・・・やっと終わったって感じた。タキシード男が言うほど、レパシー習得も楽ではないなあ。っていうか、中学生に理解できる内容なのか、これ？・・・まあ、命がかかっているから、文句は言えないよな・・・、気長にいくしかないな・・・。

「坊や、何をぼーっとしているのですか。食事にしましょうよ」

結局こいつとの食事も続いている・・・。

「ねえ、坊やってば！・・・はっ、さては例の好きな人のことを考えているんですね！？し思春期の憂鬱という奴ですか？も、もしよろしければ私が相談に乗りますよ？」

「あ、ああ、そうだな」

「えっ、いいんですか？で、誰なんですか、お相手は？も、もしかして・・・あのタキシードの・・・」

「ちげーよ！」「そうだな飯にしよう」って意味だよ！それと、（相手は）タキシードじゃねえから！」

「なんだ・・・そうですか。でもその反応からみるに、好きな人、本当にいるんですね・・・クスクス」

本当こいつはゴシップネタが好きだよな・・・。

その後、いつものごとくメイドが二人分の食事を運んできてくれた。
それを食べながら、また会話に花を咲かせる。

「なあ、質問があるんだけど、いいか？」

「はい、なんでしょう。スリーサイズとか？」

「ちげえよ！誰もあんたの体のことなんか興味ないから！」

「そうですかぁ・・・私は坊やの体のこと、興味あるんですけどね
え・・・じゅるり・・・」

こ、怖いからそんな目で見ないでください。

「・・・えつと、だな。その、執事さんよ。あんた、あんなに授業上手いのに、なんで教師にならなかったんだ？資格は持つてるんだろ？ぶつちやけ、うちの中学の教師より、授業うまいと思うんだが・・・」

執事はまさか僕がそれを褒めるとは思っていなかったらしく、「ええっ！きゃっ、うれしい！」とか言っではしゃぎだした。

「・・・いいから、早^はよ質問に答えんかい！」

「えっへへ。ええとですね、その、実を言いますと、私は教員には向いてないと思うんですよ」

「はあ？そんなことないだろ」

「いやいや、それがですね・・・私も一応、教員として働いていた時期があるんです。大学を出たその年に、少しだけ」

「そうなのか？なんでやめちまったんだ？」

「ふふ・・・それがですね・・・私が働いていたのって、小学校なんですよね。で、ほら、私ってこういう性癖じゃないですか？それが災いしまして・・・その・・・男子児童に手を出したら、懲戒免職されてしまいました！」

「ぶぶーっ！」

「わっ、汚い！」

「す、すまん・・・立ち入ったことを聞いてしまって・・・」

「いえいえ、いいんですよ」

「どうやら僕は「地雷」を踏んでしまったらしい。触れない方がよかったな・・・」

「それに、私、こうして坊やに授業をしているだけで幸せです。ああ執事になって、よかったあ」

「……」

やっぱりこいつは筋金入りのシヨタコン野郎だな、と僕は思っていた。

そんなこんなで食事が終わり、メイドがそれを片づけた。彼女と入れ替わりに、タキシード男が入ってきて、「テレパシー習得は進んでいますか？」と状況を確認しに来た。当たり障りのない返事を送ると、「そうですか。引き続き頑張ってください」と言い残し、男は去っていった。

（いちいち確認に来るなんて、ご苦労なやつだ。）

「ふう。私も坊やの教師である以上、責任が重いですねえ。彼も相坊やに期待しているようですし……」

「そうなのか？まあ。期待とかどうでもいいけどな、僕は」

「……え、何それ。彼に対するツンデレ表現ですか？」

「んなわけあるか！」

「……ふう、よかった……」

ヤキモチかよ。

「……あ、そうだ。もう一つ質問してもいいか？」

「なんです？」

「あのタキシード男のことなんだけどさ。あいつって一体何者なんだ？「お嬢様」とどう関係しているんだ？」

そう聞くと、変態教師は急に引き締まった表情になり、「本当に聞きたいのですか？」と問いかけた。

「ああ」

緊張の面もちで、僕は言った。

「・・・私が言ったって言わないでくださいね？それと、聞いてあまり楽しくなる話ではありませんよ」

そう言うと、執事はタキシード男について知りうることを語り始めた。

私が生まれた家はとかく貧乏で、それでいて狭いものだった。

兄弟は7人いた。もしかしたら、それ以上いたかもしれない。父親が女ぐせが悪く、とつかえひつかえ愛人を作っていたせいだ。腹違いの兄弟たちで、狭い家はあふれていた。

私の母親は、小さな居酒屋の女将だった。ある日飲みに来た父親と恋仲になり、気づいたら、私をはらんでいたらしい。だが、親父の女癖の悪さに嫌気が差し、私が小さい頃に違う男とどこかへ行ってしまった（これは後で父親に聞かされた話だ）。

私の母親がそうであつたように、父親の元を去っていった「母親」たち。家は、そんな「母親」たちから生まれた腹違いの兄弟であふれていたのだった。

父親は飲んだくれであつた。夜な夜な別の女を連れてきては、狭い家の中で宴会を催した。私たち兄弟に酒を注がせたり、調達させたりした。時として、酔って私たちに暴力をふるうことすらあつた。とにかく最低な父親だったと思う。

だが、そんな最低な父親でさえ、私たち兄弟には居てくれた方が良かったのだ。

ある日、父親が逮捕された。女がらみで暴力沙汰になり、相手の男を過って殺してしまつたらしい。家には、父親しか保護者となるべき人間がいなかったため、私たち兄弟を養ってくれる人がいなくなつてしまった。

その結果、私たち兄弟は、個別にそれぞれの「引き取り先」へと引き取られることになった。私は、遠い親戚の家へ。その日を境に、兄弟はバラバラになり、疎遠となった。今彼らがどうしているのか、それは私にはわからない。

親戚の家に移ってから、幸せな日々が続いた。食事や着替えもきちんとう意してもらえたばかりか、学校にだって行かせてもらった。義母や義父は私を可愛がってくれ、私もそれに甘えた。彼らの間に他の子どもがいなかったのが、少し残念だったが、私には申し分のない環境だった。

そんな幸せな日々が何日も続いたが、ある日、転機が訪れた。家が火事になったのだ。その結果、近所の住人に救われた私だけが生き残り、義母や義父はこの火事が原因で帰らぬ人となった。

こうして、私はまたひとりぼっちになった。

あの火事から何日も経たないうちに、私はとある児童養護施設に入ることになった。義父の叔父の知り合いがその施設の施設長だったから、入所はスムーズにいった。それまでは、私を助けてくれた近所のおじさんに世話してもらっていたが、さすがにいつまでも世話になるわけにもいかなかった（おじさんの家族が私が早急に出ていくことを望んでいたらしい）。

おじさんの元を離れる際、彼は私を強く抱いた。そして涙ながらにこう言った。「強く生きろよ」と。

「うん」

おじさんの温もりの中で私も泣いた。

そうして、養護施設での生活が始まった。

施設での生活に関わる資金は、大人になってから返すという条件で、義父の叔父に出してもらったことになった。

施設には、親を失った子どもや、親に捨てられた子どもが住んでいた。住むと言っても、何もかも自由というわけではなく、一般的な学校のように、時間割が組まれ、基本的にそれに沿って時間が動いていた。勉強や運動、掃除や料理などを他の子どもと一緒にやった。

他の子どもと一緒に生活していく中で、私は次第に火事で家族を亡くした悲しみから立ち直っていった。

そうして施設での生活にも慣れてきたある日の出来事・・・。

朝から夕方までは、時間割に沿って皆が行動を共にするが、それが過ぎれば、それぞれの自由時間となる。私は誰もいない部屋で本を読んでいた。するとどこからか、楽器を演奏する音が聞こえてきた。誰だろう。私は何となく気になって音のする部屋を覗いてみた。

その部屋では、女の子がバイオリンを弾いていた。その可憐な姿、美しい音色に私は息を飲んだ。

「きれいだ・・・」

私は思わず、そう口にしていた。

「!？」

すると、私の存在に気がついたのか、彼女がこちらを見た。

そして演奏を止め、「こんにちは」と言って微笑んだ。

「こんにちは。勝手に聞いていてごめんなさい。本を読んでいたら、音が聞こえてきたものだから、誰かなと思って見に来たんです。それがあまりにも上手だったので・・・」

「ふふ、いいのよ。褒めてくださってありがとう。私こそ、読書の邪魔しちゃってごめんなさいね」

「邪魔だなんて、そんな。むしろ、こんな美しい演奏を聞いたこと

に感謝したいくらいです。それは、なんという曲なのですか？」

「ふふ。これ？これはね、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲。綺麗な曲でしょ。でも、すごく難しいんだ。いつかオーケストラとやりたいって思って、練習してるの」

「そうなんですか。すごいですね……。あの、お願いなのですが、もう一度聞かせてもらえませんか？」

「え、うん、いいよ。まだ練習中でうまく弾けてないから恥ずかしいけど……」

そう言いつつも、彼女は再びバイオリンを構え、その曲を弾き始めた。やっぱり、綺麗だ……。

「ふう、どうだった？私、うまく弾けてるかな？」

「はい、とてもお上手です。うつとり聞き惚れてしまいましたよ」

「ふふ……。あなたはお世辞がお上手ね」

それから、しばらくの時間、彼女とお互いのことについて軽く話した。

「また、聞きに来てもいいでしょうか？」
私は聞いた。

「うん、いいわよ。誰かに聞いてもらった方が、練習にもなるしね」

「ありがとうございます。この施設での楽しみが増えました」

「ふふ。そう言ってもらえると、私もうれしいわ」

これが私と「お嬢様」との出会いだった。

それからというものの、施設での生活の中で、私は、彼女、いや「お嬢様」と過ごす時間が増えていった。勉強の時間、料理の時間、掃除の時間、そして放課後。何かにつけて、私はお嬢様に近づこうとした。しまいには、お嬢様にバイオリンを教えてもらったり、私のおすすめの本を貸したり……。

そうして一日一日と時は流れ、気がつけば、私たちはそれなりの年頃になっていた。

私はこれまでの人生の中で、感じたことのない感情をお嬢様に抱くようになっていた。人はそれを「恋」と呼ぶのかもしれない。それも「初恋」と。

ある時、お嬢様に対する私のこの感情をどう整理したらいいかわからなくなり、施設で働く女性職員に相談したことがある。その施設職員はこう言った。

「そんなに気になるのなら、デートに誘ってみたら？それで本当に一緒にいたいと思えるのなら、告白してみたら？」と。

デートに告白……。それまで経験したことのない行動。そういう行動が「恋愛」には必要であるということは、それまで生きてきた中で自ずと学習してきたつもりだが、いざそれを実行しようとなると、なかなか踏み切りがつかないものだった。「どのように切り出せばいいものか……」私はひたすら悩んだ。

だが、いつまでもウジウジと悩んでいるわけにもいかない。私とて、もう一人前の男なのだ。このくらいの行動を切り出せなくてどうする。そう思って、とうとう私はお嬢様をデートに誘うことにした。

「決戦」の日……。いつものように、放課後、お嬢様のところに行ってきた私。お嬢様は、今日はバイオリンではなく、ピアノを弾いていた（ここに来る前に、どちらも習っていたらしい）。

「今日は何を弾いてるのですか？」

何事もないように、私は聞いた。

「今日？今日はね、シベリウスの「^{もみ}樅の木」という曲よ。これを弾くと、ちよっぴり切なくなるけど、結構好きな曲なの」

「そうなのですか。たしかに、哀愁が漂っていますね」

そうでしょう、と言って、お嬢様は笑みを浮かべた。

それからしばらくの間、彼女が弾くピアノの音色に酔いしれていた。

お嬢様は真剣に練習なさっている。ああ……。あの話題を切り出さなくて。でも、そうすることで彼女の練習の邪魔をしてしまわないだろうか。いやいや、いかん。そんなこと気にしては、いつ

まで経っても誘えないではないか。今日こそ誘わなくては……。

「あのう、突然ですが、オーケストラの生演奏って聞いたことがありますか？」

「え、どうしたの急に？うーん、あるっていえばあるけど、ここに来る前だから、聞いたのはうんと小さいとき。だからもう覚えてないなあ」

よし来た！

「そうでしたか。あの、もしよかったら、チケットがあるので、一緒に聞きにいきませんか？」

そう言っで、私は泣けなしの金であらかじめ購入しておいたクラシックコンサートチケットを見せる（もちろん2枚）。

「え、うそ！？本当に!？」

そういつて、彼女はピアノ椅子から立ち、食い入るようにチケットを見つめた。

「うわっ、本物だ！しかも、このオーケストラ、あの有名な……い、いいのかな？私なんかと一緒にさせてもらっても……」

「え……ええ……。わ、私はあなたと一緒に聞きたいので……」

そう言ったとき、私はまともに彼女の顔をみることができなかった。何せ、こんなクサイ台詞、吐いたことがなかったから。

「本当？うれしい。じゃあ、約束ね」

「はい」

こうして、私は何とかお嬢様をデートに誘うことに成功したのだった。

（お嬢様がオーケストラの演奏を生で何回か聞いたことがあったならば、どうしていたのだろう。私は・・・）

その日は雨が降っていた。私は、お嬢様と一緒に施設を出て、駅に至るバスへと搭乗した。何を隠そう、今日はお嬢様との「初デート」。
緊張の色は隠せない。一方でお嬢様と来たら、「今朝タロット占いをしてみたのだけれど、あたらしい出会いがあるでしょう、つていう結果が出たわ！」などと他愛もないことを話す（あ、新しい出会いだと・・・！？）。

しばらくして、駅へと到着した。それから、コンサートホールのある街まで電車で揺られた。電車は意外と空いていて、私たちは難なく座ることができた。だが、何駅か通過するに連れて、だんだんと混んできたため、すぐに座席は埋まってしまった。

そのおかげでお嬢様と密着して座ることとなった……。どぎまぎする私。だが、相変わらずお嬢様はそんなことは気にもせず、血液型占いがどうのこうのといった他愛もない話をされている。私はうまい具合に話を合わせていた。

そんなこんなで、しばらく電車で揺られていると、目的の駅に着いてしまった。白いワンピース姿のお嬢様は、はしゃいだ様子で、「さあ行きましょう」と言って、駆けていった。

「駅構内であんまりはしゃぐと危ないですよー！」

私はその背に叫んだ。すると、お嬢様は「わっ！」と叫んだかと思うと、次の瞬間には転んでしまった。私はすぐさま駆けつける。

「あいたた・・・」

「ほら、言わんこっちゃありません」

「ご、ごめんね。私ったら、つい・・・こんな外出するのって、久しぶりだから、うれしくて」

「コンサートは逃げませんから、焦らなくっても大丈夫ですよ」

「ええ、そうね」彼女は笑った。

「ごめん、ちょっと起きあがれそうにないわ、手を貸してくれるかしら？」

「え、ええ・・・」私はとつさに手を差し出した。

「ありがとう」

そう言つて、お嬢様は私の手を取り、立ち上がった。

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません。はは・・・」

ひよんな事で、お嬢様と手をつないでしまつて、私はまたどきまぎしてしまつたのでした。

それから、コンサートまでまだ時間があり、お腹も空いたというこ
とで、店に入って食事を取ることにした。お嬢様と向き合つての食

事……。私はまたどきまぎした。ふいに「今、私たちは他人から見たら、恋人同士に見えるだろうな」などと思つてしまい、それがまた余計私を緊張させた（私はこんなにも気が小さいのだ）。

一方でお嬢様と来たら、久々に外出できた喜びからか、非常に饒舌になつており、私とは対照的だ。さきほどから、「ねえ、プラトンのいう、アイデアであると思う？」などと、話している。私は頑張つて、うまく会話を合わせていた。

そんなこんなで、いよいよコンサートの時間となつた。私たちは、入り口でチケットを見せ、難なく会場へと入つた。座席を見つけ、そこに座る（これまた隣同士）。今度はどきまぎしないようにしないと、いや隣合わせで座っている時点でそれは無理だな、などと私は思った。お嬢様は熱心にパンフレットに目を通している。

それから程なくして、オーケストラが入場してきた。私たち観客はそれを拍手で迎え入れる。いよいよ演奏が始まる！

コンサートの曲目は、幻想序曲「ロミオとジュリエット」、弦楽セレナーデ、そして交響曲第6番「悲愴」で、オール・チャイコフスキー・プログラムだ。チャイコフスキー好きなお嬢様にぴったりな演奏会となつていた（だからこそ彼女を招待したという事もある）。

初めて聞く、オーケストラの生演奏。それを私の好きな人と聞けるなんて……。私としては、もうそれだけで感無量だった。

演奏中、ふと彼女の方を見てると、彼女は泣いていた。

「綺麗ね。とっても・・・」

・・・

・・・

そうして、演奏会は拍手喝采のうちに終わった。

帰り道。

私は、お嬢様に言うべくして考えてきた言葉を伝えようと、タイミングを見計らっていた。だが、今日でいいのか？まだ早くないか？言うにしても、きちんとした場所がいいんじゃないのか？などという疑問が頭の中をよぎり、私はそれを言うことが出来ないでいた。

すると、お嬢様が、

「あのね、私、ちょっと今日思ったことがあるんだ」

と話を持ちかけてきた。

お、思ったこと・・・まさか、こゝ告白？いや、そんなことは・・・ない・・・よ・・・な・・・？

頭ではそんなことを考えても、顔には出さないよう平静を保ってた。

「はい、なんでしょう？」

「じ、実はね・・・私・・・」

その彼女の「思い」が、私たち二人の運命を変えることになるうとは、思いもなかった。

「実はね、わたし・今日の演奏会、あなたと一緒に来られて本当に良かったと思っているの」

とつさに彼女はそう私に告げた。

え、そ・それって、まさか・・

告白？！

・・・なわけないよな。まあ待て、待つのだ私。まだ慌てるような時間じゃない。

「コホン。そうですか、それは良かった。誘った私もそう言っただけで、うれしいですよ」

そう言って、お互いに微笑み合う。

「でね、私思っただけど・・」

ごくり。私の緊張の度合いが最高潮に達する・・。

「私・・プロの演奏家を目指そうと思っの」

え、あ、はい？

「プ、プロって、バイオリンの？」

期待を裏切られただけでなく、彼女の思いつきに驚きを隠せない私。

「そう。バイオリンの……。今日の演奏会を聴いていてね、本当に綺麗だなんて思ったんだ。それで、私もあんな風にコンサートホールで弾けたらいいなって、思ったの。うんうん、前々から思ってたけど、今日の演奏会を聴いたことで、やっぱりそうしようって決心がついたわ」

彼女が話している間、その真剣な口調、眼差しに翻弄されていた。

「そうですか……。ならば、私にできることはそれを支えること、ですかね」

「えっ？」

「考えてみれば、私はあなたのバイオリンのファンなのかもしれない。せん。あの日、あなたが奏でるバイオリンコンチエルトを聴いて、私はなんて美しいんだろうと思った。そして、それがきっかけで私とあなたは出会ったのです。これは運命的なものだと、私は感じています。ですから、私にぜひお手伝いさせてください。」

「い、いいの？」

「ええ、私がそうしたいのですから」

そう言っていると、彼女はにっこり笑って、力強く「ありがとう！」と言って、私に抱きついた。

「うわっ、あ、雨で濡れますよ!？」

嘘。本当はもうほとんど雨なんて降っていなかった。私がそう言ったのは、ただの照れ隠しだった。

「ふふふ、いいのよそんなの」

しばらくして、彼女は私から離れた。

「私があなたの奏でる音に魅了されたように、様々な人を魅了できるといいですね」

「そうね。そんな日が、来るといいなあ。あつ、そうだ、私がプロになったらあなたには私のマネージャーをやってもらおうかしら」

「マ、マネージャーですか。い、いいですとも！おやすいご用です！」

「うふふ、じゃあ決まりね。一緒に頑張りましょう！」

そう言っただけで彼女は私に握手を求めた。

「ええ」

私はこうして、彼女の付き人となったのだ。正直に言えば、このときは彼女が本当にプロになるとは微塵も思っていなかった。このと

きの私は、ただ彼女と一緒にいたいという目的を果たすために、彼女への協力を願い出たまでだった。

「ふんふん〜ふふふふ〜ふ〜ふふふ〜んふふ〜ん」

「そ、それはラヴェルの・・・」

「そう、亡き王女の為の Павана。さっきの演奏会のアンコール曲」

ああ、そつえば。

「とても綺麗な曲ですよ」

「ええ、本当に・・・私、この曲大好き。よく覚えてないんだけど、小さい頃、ピアノでよく演奏した気がするのよね」

「へえ、そうなんですか。じゃあ、今度、私にも聴かせてくださいよ」

「ふふ、いいわよ。帰ったら、早速、聴かせてあげる」

「ええ、でも帰ったら夜遅いですから・・・また明日にでも」

「走って帰ればまだ大丈夫な時間でしょう？行くわよ！」

「わっ」

そう言うと、彼女は私の手を引いて走り出したのだった。変わりは
じめる私たちの関係を象徴するかのようには。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4502x/>

悲痛なテレパシー

2011年12月1日18時48分発行